
猫と狼と魔法使い

リズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と狼と魔法使い

【Nコード】

N3606P

【作者名】

リス

【あらすじ】

魔法が存在した時代、アレストレアという国のメリルという小さな町にある本屋に1人の男の子が生まれる。

リンネと名付けられた男の子でしたが、十二歳の誕生日に事故で両親を亡くしてしまいます。

身寄りもなく、途方にくれたリンネは両親との楽しい思い出に耐えられなくなり町を出ます。

そして

別れと出会い

魔法がまだ存在した時代、アレストレアという国に1人の男の子が生まれた。

名をリンネと名付けられた男の子、決して裕福な家庭ではありませんでしたが、男の子はすすくと育ちます。

リンネは非常に頭がよく、すぐに読み書きを覚え、勉学に才を見出だした。

趣味は絵を描く事。

リンネの生まれた町ではリンネの事を神童だなんだのともてはやしていました。

リンネの実家はしがない本屋を営んでいて幼い頃から様々な本に触れていたのが幸いしたのでしよう。

そんなリンネが12才を迎えた。

今日は本の仕入れに行った両親が帰って来る日でもある。

雨が自宅の窓を激しく叩いていた。

リンネに恐怖はなかった、両親の安否の方がリンネには心配だったからだ。

両親が仕入れに行っているときは自分で料理を作るようになっていたリンネは、この日、パンをくわえて買って貰ったキャンバスに向かって一枚の絵を仕上げようとしていた。

自分と両親を含めた三人を描いた絵だ。

あとは髪に一筆いれるだけ。

そんなとき、自宅の木のドアが勢いよく開いた。

別れと出会い？

「リンネ君！」

開いたドアから横殴りの雨が入り込んでくる、姿を表したのは見知った男性だった。

しかし父ではない、青ざめた顔のその男性は、両親と共に仕入れに行った従業員、同伴者だった。

この男性が帰ってきたのに両親が姿を表すことはないそれがどういう事か。

リンネはその男性の言った言葉に己の耳を疑った。

「リンネ君、良く聞いてくれ、実はな」

男性が膝を落として震える声で両親が帰らない理由を話はじめた。どうやら男性は先導として両親の乗る馬車の前を走っていたらしい。

しかし山道に差し掛かった際に馬車の車輪が泥濘にハマったのだそう。うだ。

男性が気付कि、助けようと馬をそちらに向けた瞬間だったそう。

「すまない、ご両親を助けることが出来なかった……」

男の話では両親を地滑りが襲った。

山の斜面がまるで滝のようだったという。

リンネはその話を信じなかった。

というよりは、信じる事が出来なかった。

「おじさん、意地悪は止めてくださいよ、今日は僕の誕生日なんですよ？」

「すまない、どうしようもなかったんだ」

膝を付き、頭を抱えた男は、何度も何度もリンネに謝った。

その行動、言動、全てが両親が死んだんだとリンネに伝えていた。

見知った男の震える肩に手を置くリンネ、実感の湧かない両親の突然の死。

リンネは涙を見せなかった。

悲しくなかった訳ではないだろう。

ただそれ以上に両親を師と仰ぎ、両親の死にめに直面し、今ここで号泣している男が哀れで仕方なかった。

だからなのだろう泣きたいのを堪え、リンネは男に「おじさんは悪くないんだから泣いちゃ駄目だよ」とだけ言った。

そして、奥に行くのと立て掛けていてキャンバスに最後の一笔を加え、それを呆然と眺めた。

雨はいつこつに止む気配がなかった。

別れと出会い？

翌日、天気はまだ回復せず。

雨は止んだが空はまだ厚い雲に覆われていた。

リンネは黒い服、喪服を身に付け町の外れにある小高い丘、共同墓地にたたずんでいた。

中身のない棺桶が埋められ、両親の名が刻まれた十字架がたてられる。

しかし、リンネには実感が湧かない、遺体の無い空の棺桶。その上に佇む十字架を見てどうやって両親の死を実感すればいいのか。

集まった町の人達から哀れみの目で見られる事のほうがリンネにはよっぽど嫌だった。

「まだ幼いというのに」

「親類もいないんだってねえ」

リンネは走った、母に似た銀の髪をなびかせて、父に似た紅い瞳に涙を溜めて。

（嘘だ母さんが死んだなんて、父さんが死んだなんて）

丘を駆け、町に向かい、住み慣れた家に向かう。

家に帰ればいつもの毎日が待ってる、これは悪い夢だ。

自分にそう言い聞かせてリンネは走った。

家の前まできたリンネは、勢い良く木製のドアを開けた。夢なら覚めてくれる、ドアを開ければいつも優しくった父や母がいっものように抱き締めてくれる。そう信じてドアを開けたのだ。

しかし、家の中は朝と何ら変わりなかった。明かりの灯っていない薄暗い部屋がそれを物語っていた。

「ーっくっ」

リンネはそこで初めて涙を流し、声をあげて泣いた。襲ってくるのは両親の死という現実と孤独感。

そして何よりも両親と過ごしてきた思い出が、今のリンネには一番辛かった。

別れと出会い？

葬儀の次の日、メリルの町からリンネの姿が消えた。最初に気付いたのは従業員の男だった。

リンネの事を気掛かりに思った男が家を訪れたのだが、その時には既に姿は無かったそうだ。

リンネは明朝、まだ日も昇っていない時間に町を発っていた。行く宛など無い。

ただこの町に、両親との楽しい思い出しかないこの町に居るのが嫌だった。

持てるだけの水と食料を革の鞆に詰め、家に置いていたロープを見にまわってリンネはただ歩いた。

少しでも早く、少しでも遠くに、そんな事を考えていたのかもしれない。

しかし子供の足だ、そう早くは歩けない。

道端に突き出た岩に座りパンをかじる。

一口食べたただけだったが、リンネは口を止めた。

どうしても美味しいと感じることが出来なかった。

一昨日食べた、美味しいと感じたパンと同じものなのだ。

食欲もわかず、ただ呆然とリンネは空を見上げた。

昨日の曇天が嘘のような晴天だ。

美しい空模様に流れる雲が輝く太陽を隠す。

リンネはしばらく呆然としていたが、それを合図にするように腰を上げ、再び歩き始めた。

家に居るとき、どうしようかと考えていた、店を継ごうかとも思った。

親戚は居ないが良くしてくれる人なら居るだろう。

自立出来るようになるまで世話になるうかとも考えた。

しかしどれもダメだとリンネは思った。

あの町に居る以上幼くして両親を失った可哀想な奴。

そういう目で見られるのが一目瞭然だった。

リンネはそれを良しとしなかった、ちっぽけなプライドだったのかもしれない、しかし哀れみの目で見られれば両親の事を思い出してしまう。

それが嫌だから、リンネは町を出たのだろう。

「さようなら皆さん、さようなら大好きな町……さようなら父さん、母さん」

小さく見える町に向かってそう呟くと、リンネは町に背を向けて歩きだした、振り返る必要はない、手を振ってくれる人はもういないのだから。

別れと出会い？

あれからどれくらい歩いただろうか。

安定した気候で旅するには持つてこいのこの季節、花は咲き乱れ、野鳥の鳴き声も遠くから聞こえてくる。

夜も暖かくなってきた、野宿するにも幸いな季節な訳だ。

しかしそんな時、リンネはある問題に気付いた。

食料が底をついたのだ。

水は近くを流れる川の水を汲む事ができたが、食料は町に行くか、森に入って探すしかない。

リンネが選んだのは後者だった。

一番近い町は今のまま歩けば2日は掛かる。

しかし、森ならすぐそこだ、小さくだが深い緑色が山際に広がっているのが見えている。

ただ、深い森だ、迷えば野垂れ死にするかもしれないし、獣に襲われるかもしれない。

「死んだって悲しむ人はいないよね」

少年は、あるいは己の死を望んでいたのかもしれない。

次の町との位置取りが正反対の森に少年は歩を進めた。

今まで歩いてきた草原から森に向かう。

地図とコンパスを鞆にしまい、リンネは代わりに持ち出して来ていたダガーを取り出し、それをケースごとズボンに括りつける。

そしてまたしばらく歩くのだ。

十一十一十一

太陽が傾き、沈み始める頃、リンネはようやく森に到着した。

「食べれる木の実があるといいな」

森は背の高い木々に覆われ、薄暗かった。

奥へと進んでいき、リンネは木の実や木の根元に生えるキノコを探した。

そこでリンネは自らの失態に気付いた。

「この森は……」

リンネの居る森の木が全て実のならない針葉樹が乱立する森なのだ。

辺りはもう薄暗い、動くのは危険だ。

遠くから遠吠えが聞こえた、間違いなく狼だろう。

リンネは空腹を我慢し、今日の寝床を探すことにした。

今思えばこの時草原まで引き返していれば良かったのかもしれない。

森を夜の闇が覆っていく。

リンネは大きな木を背にして腰を下ろした。

枯れ葉と落ちていた木の枝を集め、火打ち石を叩き火を起こした。
暖を取り、獣を避けるためだ。

「おなか、空いたな」

火の暖かさでウトウトしはじめた頃、またもや狼の遠吠えが聞こえた、先程より近づいているように感じられる。

そんな時だ”カサカサ”と、複数の何かが枯れ葉を踏むような音がリンネの耳に入った。

別れと出会い？

気付けば、リンネは森の中を駆けていた。
焚き火を松明がわりに暗い森をただ走った。

聞こえてくる獣の足音と息づかい、リンネはいつの間にか狼達に囲まれていたのだ。
遠吠えが響く森の中はひどく不気味で、今にも暗闇から狼とは別に何か飛び出してきそうだった。

幾度も転びそうになりながらも、なんとか耐え、リンネは走る。
飛び掛ければ直ぐにでもリンネは喰われてしまうだろうが、狼達はリンネが弱るのを待っていた。

動物というのは、襲われた際に突発的に自分でも思いもよらない反撃を行う。

狼は群れ社会のなかで生きている動物だ、仲間が傷付くのを極端に嫌う。

よって、単体で獲物をしとめようとせず、弱るのを待ち、皆で美味しくいただくのだ。

そして今のリンネは空腹という状況下で暗い森の中を必死に走っている。

狼に追われ、いつ襲われるとも分からない重圧が、みるみるリンネの体力を奪っていった。

「うわー！」

そしてとうとう、リンネは木の根に足を引っ掛けて転んでしまう。

狼がリンネを囲み、様子を伺っていた、待っているのだ群れのリーダーの合図を。

唸る狼達。

リンネの顔に恐怖は無かった。

狼相手に良く逃げたものだ、と、そんなことを考えていた。

群れのリーダーだろう、一際大きな遠吠えが響いた。

牙を剥く狼達。

リンネは諦めたか、微笑みを浮かべた。

これで両親に会える、そう思っていたのかもしれない。

「お止め！ アンタ達！」

狼達がリンネに飛び掛かるうとした丁度その時だった。

リンネの耳にしわがれた老婆の声が聞こえた。

するとどうだろう、牙を剥き、唸っていた狼達が急におとなしくなった。

というよりは、耳と尻尾が垂れ下がってしまっていて完全に怯えている。

聞こえた声がなんだったのか、リンネは考えあぐねていた。

こんな森の奥、人が住んでいたというのか、何故狼達は脅えているのか、声の主が人間なのかどうなのか。

その声の正体は直ぐに表れた。

火の粉を散らすよう逃げ出す狼達。

残ったのはリンネと、いつ表れたのか、リンネの前に立つ姿勢のいい、中背の老婆だけだった。

森の魔法使い

「まあなんでこんな森の奥に君みたいなお子供が……」

ふと、老婆が呟いた。

しかしその声は先程のようにしわがれてはおらず、もっと若くに感じられた。

というよりは、現在進行形で若くなっていつている。

「ふうむ、やっぱりこの姿が一番だねえ、ああいやそれよりもだ」

リンネの目の前で老婆が姿を変えた、二十代くらいの若い女性の姿にだ。

リンネは訳が分からず、眼を点にしてその女性を見つめた。

赤い髪は艶を取り戻し、肌に刻まれていたシワは今はもう見当たらない、少しつり上がった目が凜々しい印象をリンネに与えた。

「驚かせたかい？ それならすまなかつたね、さて、一、二質問するよ？」

「え、あ、は、はい」

リンネは訳の分からないまま首を縦に振った。

その様子に先程まで老婆だった女性は木の根に腰を掛けると、口を開いた。

松明の灯りはそこまで届かないはずなのだが、女性の姿はハッキリとリンネに見えていた。

女性が松明を持っている様子ではなかったのだが、女性の右隣辺り

には確かに炎が揺らめいている。

「君、名前はなんてんだい？」

「リ、リンネです、リンネ・ノーラン」

「ふむ、では次だ、君は何故こんな森の奥にいる？」

この質問にリンネは顔を伏せてしまった。

しかし、リンネは真面目ないい子だ。

黙っているのは得体が知れないとはいえ、相手に失礼と思い、この森に入った理由と旅をしている理由を話した。

「その歳で両親をねえ、辛かったろうに」

女性のは立ち上がると、リンネのそばにより、リンネの頭の上にポンと手を置いた。

そして聞き取れるか聞き取れないかの声で何か呟くのだ。

「ふむ、嘘はついてないみたいだね」

リンネには聞こえなかったようだが、女性は確かにそう呟いていた。

「今日は夜も遅い、家において、明日ゆっくり話そう」

女性の言葉にリンネは従った。

正体はいまいち把握しきれなかったが、せつかくの厚意だ、何よりもこの機会を逃せばまた危険にさらされる。

「ありがとうございます、えっと……」

「ラウラ、この森に住んでる魔法使いの名前さね」

森の魔法使い？

自らを魔法使いと名乗ったラウラという女性。
そんなラウラの言葉にリンネは納得していた。

突然姿を表した事も、老婆から年頃の女性に姿を変えたことも、魔法だというなら納得するしかない。
リンネは生まれて初めて魔法という物を見るが、確かにこの世界には魔法という技術が存在しているのだ。

「じゃあ、先に行って準備してるからね、ゆっくりおいでな」

そう言うとラウラは姿を消した。
表れた時のように突然の事だったので、リンネは夢でも見てたのではないかと思い、松明の灯りだけが光る森の中で自分の頬をつねってみた。

頬から伝わる傷みに今起こった事が現実だと実感する頃、近くの木に異変が起こった。

ランプに灯が灯るように小さな火が1つ木の幹に灯ったのだ。

そしてその火は1つ、また1つと別の木に灯り、さながら貴族の屋敷の廊下の様な光の道を作り上げた。

「綺麗だなあ」

思わず口からそんな言葉がでた。

暗い森に出来た光の廊下は確かに幻想的で美しい。

気付けばリンネはその廊下を歩き始めていた。

どこまで続くのかと思うほどに光の廊下は続いている。それは森の暗さと火の明るさで、先が見えないからだ。

まるで今の自分の立ち位置をそのまま表しているような。

そう思うとリンネは急に不安になった。

”不安”と一言で片付けるのはあまり良くないかも知れない。

悲しみや絶望、そんな様々な感情がリンネを押し潰そうとしていた。

そんな時だ、光の廊下の先に一際大きな光がリンネの目に入った。

優しく、我が家を思い出させるその光は一軒の木造の家。

その家がラウラの物だと理解するのに時間はいらなかった。

木製のドアにリンネは近付きドアノブに手を伸ばす。

しかしリンネの手は空気を掴んだ。

リンネがドアを開けるより先にラウラが中からドアを開けたのだ。

「いらつしゃい、さあ入りな」

笑顔を見せるラウラを見て、何故だろうか、リンネの紅い瞳から涙が流れた。

「おやおや、何泣いてんだい」

そう言ってリンネの頭を撫でるラウラ。

この日からリンネと森の魔法使いの共同生活が始まった。

リンネとラウラ

夜も更け、ラウラに今日はもう寝るようになられたリンネはあてがわれたソファアで眠りについた。

久々に暖かい寢床で、直ぐに眠りにつくリンネ。

そんなリンネにラウラは毛布をかけるとリンネの頭を優しく撫で、側を離れた。

oooooooooooo

次の日、リンネはラウラに起こされて目を覚ます。
久しく呼ばれなかった自分の名前をリンネは妙に懐かしく感じた。

「おはようございます、ラウラさん」

「ん、おはよう。おいで、朝食にしよう」

促されるまま食卓に導かれたリンネは、ラウラが椅子に座るのを待って、その対面に座った。

用意されていたのはこの森で取れた物だろうか、キノコと木の実のスープと、スライスされたパンだった。

「頂きます」

そう言っつて、木で作られたスプーンを握り、リンネはスープを口に運ぶ。

久々の温かい食事は実に美味に感じられた。

食事の間、二人の間に会話はなかった、美味しそうにスープを啜るリンネと、それを微笑んで見詰めるラウラ。
リンネの様子に、出した食事が口に合うかなど聞く必要など無いとラウラは判断したのだろう。

そして双方が食事を終えたところでラウラが本題に入ろうと口を開いた。

「リンネ君、これからどうするんだい？」

ラウラの言葉に、リンネは一瞬目を伏せたが、直ぐにラウラを見直すと質問に応えるべく口を開く。

「故郷からここまで歩いてる時に色々考えてました、他所の街で働きながら暮らそうかとか、いつそのこと死んでしまおうか、とか…」

「それはいけないねえ、死んでしまつて向こうでご両親に会えても、きっと二人は喜んでなんてくれないだろうさね」

ラウラの言葉にリンネは分かっていますと言うように深く頷いた。

「僕もそう思いました、今は死のうとは思いません」

「じゃあどうするね？」

「昔、お父さんは行商人として各地を渡り歩いたと聞いたことがあります、その足跡を辿ってみようと思います」

ラウラはリンネに笑顔を向けた、会った当初の暗い顔が言葉を重ね

る度に少しずつ明るく晴れていく。
この子は本当は明るい子で優しい。
それが交わす言葉越しに伝わってきていた。

しかしラウラは危惧していた、歳の割には確かにしっかりしているが、リンネはまだ幼い。

この子の父が行商人だったというなら、旅は長くなる、この度のように森に迷いこむ事もあるだろう。

そうなればこの子は獣のエサになるだけだ。

ここで会ったのは何かの縁かもしれない。

そう思ったからか、ラウラはある提案をリンネに持ち掛けた。

「君はまだ幼い、道中危険に晒される事もあるだろう、どうだい？
しばらく、いや、時間は掛かるかもしれないけど、私のもとで修
行してみないかい？」

リンネとラウラ？

「修行？ ですか？」

「そう、修行」

修行と一概に言われてもリンネの頭には疑問符が浮かぶばかりだ。旅をするのに最も必要なものは知識だとリンネは思っている。

（勉強させてくれると言う事だろうか？）等と思っていたに違いない。

しかし、ラウラはどうやらそう言う事を言っている訳では無いらしい。

「坊やは旅するには幼すぎる、このまま旅を続ければ昨日みたいに危険なメにも遭うだろうさ」

「まあ、確かに」

「だから自分の身を護れるように色々教えようと思うのさ、危ないからねえ」

「それはありがたいのですが、何を教えてくれるんです？」

「私は魔法使いさね、教えてあげられるのは魔法だけさ」

リンネは目を丸くした、全く予想していなかった応えがラウラから返ってきたからだ。

魔法というのは確かに存在する、それは昨日自分の目で確認した。それを自分のような子供が覚え、使えるようなモノなのかと思った。

だからだろうがリンネはラウラの言葉に「え？」と、言う短い疑問系の応えしか返せなかったのは。

「まあ、直ぐに応えなくても良いさ、しばらく考えてー」

「いえ、あの！」

幼いリンネに決断を急がせる必要はない、と、ラウラはリンネに時間を与える算段だった。

しかし、リンネはそんなラウラの言葉を遮るように声を上げた。

「魔法、教えてください！ ちゃんと出来るようになるかは分からないけど、もし教えて頂ける魔法が色んな理由で苦しんでいる人達の助けになるなら」

リンネの言葉にラウラは微笑んだ、思っていた通り、この子は優しい。

例え魔法を教えてもそれを悪さには使わないだろう。

「よし、なら昼から早速勉強に移ろうかね、後悔するんじゃないよ？」

「はい、ありがとうございます！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3606p/>

猫と狼と魔法使い

2011年10月8日11時54分発行